

平成30年度 自己評価及び学校関係者評価書

平成31年3月11日
札幌市立はまなす幼稚園

1 本年度の重点目標

笑顔と対話で響き合うはまなす幼稚園

2 本年度の経営方針

- (1) 幼児一人一人が安全で安心な生活ができる楽しい幼稚園
- (2) 豊かな心と潤いあふれる幼稚園
- (3) 全職員が経営参画意識をもって、個性や能力を発揮する創造性あふれる幼稚園
- (4) 家庭や地域との協力関係・信頼関係をつくり、地域と共々いきる幼稚園

3 自己評価結果に対する学校関係者評価

A：達成されている B：概ね達成されている C：工夫を要す D：検討を要す

分野	評価項目	自己評価		学校関係者評価	
		達成状況	改善の方策	自己評価の適切さ	改善策の適切さ
教育課程	幼児の発達や実態に即し、かつ幼児期にふさわしい学校教育の実現に向けた教育活動を行っているか。	A	「幼稚園教育要領」で示された改定の趣旨に基づいて本園のよさを生かした教育課程の見直しを図り、幼児の発達や興味、関心に応じた実践と家庭、地域への分かりやすい発信に取り組んだ。今後も、実践を重ねながら活用や見直しを継続し、より多くの市民に発信していくことに努めていく。	A	A
	園舎の特徴、地域の特性を活かす創造的な教育課程の編成と改善が図れたか。	A	園の状況や環境のよさを捉え直すとともに、教職員が十分な幼児理解に努め、幼児にとって必要な多様な体験や友達との温かい関わりを保障することができた。園の環境や地域への愛着を一層育むよう、園のキャラクターや地域の活用の検討を重ねていく。	A	A
	幼児が主体的に遊びや生活に取り組むなかで、温かい会話や関わりにつながる環境の構成の工夫や援助が図られたか。	A	個々の主体性が育まれるよう、興味や関心に基づいた季節、時期に応じた遊びの工夫と援助が成されてきた。「言葉による伝え合い」をテーマにした研究を通して、伝えるだけでなく相手の言葉を聞くことのできる温かい関わりを育むことができた。	A	A
	特別支援教育における個別の指導計画、個別の教育的支援計画の作成と活用が図れたか。	A	全職員が個々の育ちやよさに目を向け、個に応じた支援を見出して保育に当たった。今後も、保護者と細やかに様子を伝え合い、園、家庭それぞれでできる具体的な手立てを見出していくことに努める。	A	A
学校関係者評価委員による意見	教育課程は一貫性があり、教職員が一丸となって取り組んでいる様子が見られる。一人一人としっかりと向き合い、幼児の発達に合わせたり力を十分に引き出したりする環境づくり、教育活動を行っている。適切な自己評価がされており、はまなすらしいよさを生かした生活ができるよう取り組んでほしい。				
学級経営の充実	一人一人の実態に即した幼児期にふさわしい生活を展開し、期に応じた集団づくりをすることができたか。	A	幼児理解に努め、個々に必要な援助や指導を講じることで、幼児同士の関わりが広がったり深まったりし、学年に応じた集団づくりができた。教育課程の改善を図りながら評価を重ね、実践に当たっていく。	A	A
	幼児と教師との信頼関係を土台に、一人一人がよさを発揮しながら友達との関わりを育むことができたか。	A	教職員同士、そして保護者とも日常的に温かい関係を築いたことで幼児との信頼関係につながった。意図的に友達よさに触れたり気付いたりできるような場面や異学年同士の関わりを重ねることを継続し、育ち合う関係を保障していくことに努める。	A	A

(様式2)

学校関係者評価委員 による意見		幼児と教職員の間にはしっかりと信頼関係が築かれており、幼児が安心できる学級経営がされている。幼児同士の関わりは、学年、異学年ともに広がりや信頼関係を築くことができるよう、対話を重視した取組がされている。さらに、教職員と保護者が情報を共有し、共に見守る関係につながるような取り組みをお願いしたい。			
研究 研修 の 推進	研究実践園としての役割を果たすため、教職員集団として高め合いながら実施できたか。	B	区幼保小連携推進協議会のよさや価値が関係機関に浸透し、幼小接続の具現化につながってきている。教職員個々が幼児教育や特別支援教育について主体的に学ぶ姿勢が、研究・研修での学び合いの深まりや高め合う関係につながっている。今後も、地域、市民への分かりやすい発信、啓発の取組に努める。	A	B
学校関係者評価委員 による意見		日々学んでいることを生かし、教職員が一体となって教育活動が進められている。取組の様子を分かりやすく発信しており、園内の学びが幼保小の連携体制の構築や、関係機関への広がりにつながっていることがうかがえる。重点目標にある「笑顔と対話」というキーワードが、さらに広がることを期待する。			
家庭・ 地域 社会・ 小学校 との 連携	幼小の連携を図り、幼児期から児童期の円滑な接続のために具体化を図ることができたか。	B	西小学校との園児、児童の交流に加え、保護者向けの就学懇談会実施での連携など、年間を通した取組を通して、園児、児童の経験や学びの連続性が図られている。また、区内、就学先の各小学校とも、長期的な見通しをもった連携・接続の具現化を図ることが求められている。	B	A
	幼児教育センターの指導を仰ぎながら、幼稚園訪問支援・地域教育相談等の業務を推進できたか。	A	幼児教育センターの補完的機能を果たせるよう、幼稚園訪問支援や地域教育相談の適切な対応のために必要な情報の収集、必要に応じてや助言を仰ぎながら取り組んできた。今後も、これまでの実績を引継ぎ、細やかな対応に努めていく。	A	A
	地域の幼児教育センター的な役割を果たすことができているか。	A	研究実践園が担う子育ての支援、保護者等啓発支援の取組である「ポロップひろば」では、地域の人材を活用した子育て講座や保護者に寄り添った子育て相談を実施し評価を得た。地域の人材、関係機関との連携や協力の可能性を探り、充実を図りたい。	A	A
	家庭や地域社会との連携を深め、幼児の健やかな心と体の育ちにつながる取組ができたか。	B	保護者メールの導入により、行事や緊急時の連絡が迅速に取れるようになったが、様々な災害等の対応の課題は残る。家庭、近隣小学校、地域の関係機関との連携を一層強め、安心・安全な園生活づくりに努める。また、幼児の健やかな育ちのために園、家庭、地域が同じ方向で取り組めるような園経営の充実を図る。	A	B
	園だより、新入園児見学会、ホームページ等を通して、園の教育活動等の情報を発信することができたか。	A	教職員の連携と工夫で、掲示やHP、各種発行物で教育活動の発信の充実を図ることができ、保護者やポップひろばを利用する家庭、更には入園を検討する家庭の理解や協力につながっている。今後も、発信する内容、時期、方法など、発信の質の向上を図る。	A	A
学校関係者評価委員 による意見		近隣との幼小連携・交流などは、素晴らしい取組をされている。校区外の小学校とも、就学に向けての円滑な接続のためのさらなる取組の充実を期待する。研究実践園としての歴史が積み重なり、ますます役割が重要になっている。ホームページなどでの発信が充実しており、外部の方の理解を深めてもらっているが、いずれの内容についても継続的な取組に努めてほしい。災害時等の対応については、改善策を検討し対応を願いたい。			